事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

11月28日日曜日
シーホース工房主催の「禅林のシンフォニー」に参加。竹林を間伐する体験や、竹を使った楽器づくりワークショップ、紙芝居や楽器演奏のステージなど盛りだくさんのいち日。当日は子どもから大人まで障害のある人もない人も、自然やアートにふれあうことを通して、同じ時間を楽しんだ。

12月11日土曜日
野毛山kiez主催のまちあるきワークショップ『まちを「知覚」する』に参加。戸部周辺を地元在住で、振付家・ダンサーの酒井幸菜さんの案内で歩く。後半では、まちなかで小さなパフォーマンスを行った。歩く、立ち止まるといった日常の仕草をダンスに見立てて酒井さんが振付を行い、参加者が動く。まちをアートの視点で味わう新鮮な体験。

12月13日月曜日
「しましまのおんがくたいwith あおば支援学校」のコンサートへ。外出が難しい子どもたちに生の音楽を届けるこのプロジェクト。あおば支援学校での音楽ワークショップを経て、横浜市青葉区民文化センターフィリアホールでのコンサートが行われた。子どもたちも一緒に楽器を演奏するコーナーもあり、会場は大盛り上がり。

3月1日 火曜日
ヨコハマアートサイト2022の募集を開始しました。2022年度もヨコハマアートサイトは横浜の地域文化を支えるアート活動を応援します。みなさまぜひご応募ください。募集期間は3月1日(火)～4月5日(火)です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

横浜のアート活動を応援する助成金
ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site
申請受付期間 2022年 3月1日(火)～4月5日(火)まで

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決にアプローチする文化芸術活動、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける活動、ヨコハマの個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO 法人 STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜ST ビル 208（認定NPO 法人ST スポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410　FAX:045-325-0414　MAIL:office@y-artsite.org　https://y-artsite.org
@Y_Artsite　ヨコハマアートサイト　ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト vol.030
発行：ヨコハマアートサイト事務局　編集：認定NPO法人 STスポット横浜　編集協力：大谷薫子　取材・テキスト：小川智紀、森崎花、田中真実
デザイン：小池佑子　撮影（表紙・特集1）：橋本貴雄　印刷・製本：共進印刷株式会社　発行日：2022年3月31日
季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしております。

ヨコハマアートサイト
Yokohama Art Site

特集
自分に出会う

ワークショップのようす（OUTBACKアクターズスクール）

vol. 030
2022

特集

自分に出会う

他者との出会いや表現を通して、自分自身を見つめる
そんな機会が生まれる場を、
横浜の地域でつくり続けているみなさんにお話を伺いました。

レポート1 OUTBACKアクターズスクール
レポート2 Picture This 2021：横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト
レポート3 スペースナナ

a.

b.

c.

d.

a. 空間を歩き、すれ違った人と握手する

b. 隣の人の背中に触れてみる

c. 空間を埋めるように歩いてみる

d. みんなで深呼吸する

レポート1

OUTBACK アクターズスクール

演劇を通して精神障害当事者の声を社会に伝える

表現を通して、声をとどける

「OUTBACK アクターズスクール」は、精神障害のある人たちがこれまでさまざまな理由で語れなかったこと、表現できなかったことを演劇を通じて発信し、自らの「生」を再構築することを目指す団体だ。その目的に共感して集まった精神障害当事者が役者として参加し、2021 年の夏から秋にかけて、舞台で活躍する俳優を講師として迎えた演劇ワークショップが積み重ねられ、作品制作を行った。

一人ひとりが持つ力

ワークショップのなかで参加者は、身体を動かしたり、音楽を奏でたり、自身の病気による経験を語り合ったりと、さまざまな時間をともに過ごすなかで、互いを知り合い、受容していった。その信頼関係のなかで参加者同士が支え合いつつ、講師が一人ひとりの潜在的な力を引き出すことで作品が完成されていく。完成した作品は、やむなく精神病院へ入院することになった主人公が、他のあらゆる患者のエピソードを聞くなかで、自身のなかに気付きを得ていくストーリーだ。精神病院を舞台にしつつ、「不思議の国のアリス」を思わせる世界観のなか、参加者一人ひとりがユーモラスに描かれていた。劇中で語られる患者のエピソードは、実際に演ずる参加者自身の病にまつわる話だ。当事者たちの生身の声からは、切実さにあふれた力強さを感じる。フィクションとノンフィクションが混ざり合い、演劇ならではの新たなリアリティが生まれていた。

舞台に立つことから

同団体代表の中村マミコさんは、活動を通して精神障害当事者が声を挙げる場、表現する場を設けたかったという。「精神障害のある人への偏見は未だに根強くあります。社会に向けて声を挙げるためには、まわりの人間だけでなく、本人の声がどうしても必要だと思っています。実際、声を挙げたい、表現したいと思っている当事者の人は多いのですが、さまざまな事情によってそれができないことが多いのが現状です。そこで、演劇という表現を通すことで、当事者たちの生身の声をうまく伝えられるのではないかと考えました」。

中村さんは、この活動が社会へ声を挙げるためだけでなく、当事者自身にとっても意味のある経験になると考える。「障害者として支援『される』立場に慣れすぎてしまうと、自分で責任を持ったり、自主的に何かに関わろうとする意欲がなくなってしまうということがしばしば起こります。残念ながら、今の日本の福祉のシステムではそういったことが起こりやすくなっているように感じています。そのため、OUTBACK アクターズスクールでは自身が主体となって動くこと、誰にも変え難い、唯一無二の存在として舞台に立ってもらうことがとても大事なことだと思っています。そのことが、彼ら／彼女らが日常を生きていくうえでの自信につながると信じています」

役を演じながら、当事者として生身の声も届ける。観客へ向けて、自分自身に向けて、対峙しながら、社会と立ち向かう姿がそこにあった。

OUTBACK アクターズスクール
https://outback-jp.com/

レポート2

Picture This 2021:
横浜インターナショナルユース
フォトプロジェクト

「外国につながる」ではひとくくりにできない
中高生たちの写真ワークショップ

違いを認め合い、肯定する

Picture This Japanが主催する「横浜インターナショナルユースフォトプロジェクト」は、写真を通して自らを表現するプログラム。参加者のほとんどは海外にルーツを持つ子どもたちだ。ワークショップでは、普段マイノリティである彼ら／彼女らがマジョリティとなり、日本人がマイノリティになる経験ができるよう意図されている。また、インターナショナルスクール、私立校、公立校と、同じ街でも違った環境で暮らす子たちが出会う場でもある。

参加者はワークショップを通してさまざまなテーマで写真を撮影し、最後に展覧会を行う。その間、参加者は互いに交流したり、一人で黙々と作業したりと自由に過ごす。不登校などの問題を抱えていても、この場になら来られるという人もいるようだ。それは、ここが違いを認め合う場だからかもしれない。これまでの参加者の感想では「『違う』っていいこと、面白いことなんだ、自信を持っていいんだと初めて思えた。違いが認められる環境が初めてだった」という声があったという。

自分自身を表現することから

代表で講師の大藪順子（のぶこ）さんは次のように話す。「ここでは自分にしか撮れないものを撮ってほしいと伝えています。写真を通して表現した『自分自身』を肯定される経験が本人たちによい影響があると思っているからです。ワークショップでは、自分で写真を撮り、その写真を客観的に見て、なぜこれを撮ったのかという解釈を通して、まず自分と向き合います。次にその写真を他の人に見せます。そのことで自分にしか見えない視点を他者に投げかけることができるんです。ただ、展示会では作品の捉え方は見る人に委ねなくてはならないので、その覚悟は必要です。彼ら／彼女らが自分自身を肯定しながら、堂々と社会とつながることができるようになってくれればと思います」。

違いを認め肯定する場から、自分にしかない伸び伸びとした表現が生まれていた。

a.

b.

c.

a. 記念撮影のようす
b. ワークショップで展示用の写真を選定する様子
c. この日撮影された写真を吟味するようす

Picture This Japan
https://www.picturethisjapan.com/

レポート3

スペースナナ

地域でゆるやかに支えあう交流の場

みんなで過ごして元気になれる場所

あざみ野にある「スペースナナ」は、ギャラリーやカフェ、ショップを併せたコミュニティカフェだ。イベントや講座の開催、アート作品等のギャラリー展示、フェアトレード製品の販売などを行っている。同スペース内には雑誌『くらしと教育をつなぐWe』の編集部がある。「スペースナナ」の立ち上げには、『We』の読者や編集者、子育て仲間、この地域でさまざまな活動を行う人などが関わった。ともに時間を過ごし元気になれる場をつくりたいという思いから、都内にあった『We』編集部の移転話をきっかけとして、2010年12月にスペースナナを開設した。運営メンバーの柴田暁子さんは「ここに来れば人と会えて話せる、元気になるという場所が地域には必要だと思います。なによりも私自身がこの場所がないと困ります」と笑う。

この場所から芽吹いていく

家族の介護や療育を行う人たちの集うケアラーズカフェや、震災避難者の交流の場「311カフェ」、地域の高齢者のためのサロン「シニアの遊び場」、厳しい状況にある家庭へ食べ物を届けるフードパントリーなど、スペースナナでの活動は多岐にわたる。運営メンバーの中村泰子さんはこう語る。「こんなことがやりたいというアイデアや思いがあって、仲間が「いいね!」と共感してくれたら、すぐに始められるのが私たちの強みです。いろいろな困りごとが寄せられたり、人との出会いによって場所自体が育ってきたと思います」。

スペースのこれからについては「最初は、若い人たちにこの場を手渡すことができればと考えていたのですが、みなさんすでに自分のやりたいことがあるんですよね。だから、やりたいことを少しでも応援できるように、おしゃべりしながら、情報を提供したり、相談にのったりしています。この場所から小さな活動が生まれて、それが地域の中にアメーバのように増えていってくれたら嬉しいです」。

「スペースナナ」を訪れると、一人ではたどりつけないアイデアやテーマに出会うことができる。ここで得たものを自身の生活へ持ち帰ったり、他の場所で活かしたりすることから、その豊かさが広がっている。

a.

b.

a. クリスマスの飾り「ヒンメリ」づくりのワークショップのようす
b. スペースナナの入り口にて、ワークショップ参加者の記念写真

スペースナナ
〒225-0011 横浜市青葉区あざみ野1-21-11
https://spacenana.com/index.html

今回の取材先では、さまざまな表現のなかで他者に出会うと同時に、自分自身に出会うということが実現していた。自分自身について、どのように伝えるか「考える」こと、考えたことを他者に「伝える」こと、伝えることを通して客観的に「捉えなおす」こと。この繰り返しが内面に気付きを与え、結果的に自分自身を認めることにつながっているようだった。

ヨコハマアートサイトラウンジ Vol.30

テーマ	寿町から見る人と社会
ゲスト	花崎攝（シアタープラクティショナー、ことぶき「てがみ」プロジェクト実行委員会） 横山千晶（慶應義塾大学教授、居場所「カドベヤで過ごす火曜日」運営委員会 代表）
聞き手・進行	小川智紀（ヨコハマアートサイト事務局）
収録日時	2021年10月22日（金）
収録場所	日吉カフェ

横浜の寿町は、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎に並ぶ日本三大簡易宿泊所集中地域の一つです。このまちで継続的に活動を行ってきたお二人をお招きし、寿町の現在、そして、そこから見えてくる社会の現状について、お話を伺いました。

花崎さんは応用演劇という分野で、ふだんは演劇に縁のない人でも、演劇を中心とした表現を通して、その人や場所にあるテーマや課題について考えるプロジェクトを行っている方です。寿地区では、ことぶき「てがみ」プロジェクトに関わっています。これは寿地区にあることぶき診療所のデイケア内から生まれた活動で、参加者がワークショップを通して書いた「てがみ」をテーマとしたパフォーマンスを行います。

横山さんは毎週火曜日に、居場所「カドベヤで過ごす火曜日」という活動を行っています。この活動はカドベヤという場所で、ダンスや描画などいろいろな表現ワークショップをして、一緒にご飯を食べるというシンプルなものです。ここは寿地区の人たちのためだけではなく、誰にでも開かれた場所で、お互いが何者かにかかわらず、人と出会える居場所です。

ディスカッションでは寿地区における生と死について語られました。それぞれの活動を通した経験から、寿地区における生と死について見えてきたこと、人を悼む・送るということとアートのつながりについてさまざまな視点から語られました。

より詳しいレポートをヨコハマアートサイトのホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

収録の様子（左：横山さん、右：花崎さん）

ヨコハマアートサイトラウンジとは
地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図ることを目的とし、横浜というまちでアートと地域の関わりについて考える交流と研修の場です。今年度はコロナ禍への対応として、収録したものを公開するかたちをとっています。

左上2枚：世田谷線を借り切った「サンタ電車」の様子　左下：三軒茶屋周辺での練り歩きの様子　右：パントリー活動で子どもたちへ図書カードを渡す様子
※写真は2021年「三茶にサンタがやってくる！2021」開催レポートより

地域文化を育む日常の人的ネットワークの大切さ

寄稿：**市川 徹**

日頃から培った人的な地域ネットワークを活かしたコロナ禍での活動について、
株式会社世田谷社の代表でまちづくりコーディネーターの
市川徹さんが、お話をしてくれました！

新型コロナが感染拡大し緊急事態宣言が出された２０２０年４月、世田谷では有志の呼びかけにより「世田谷ＮＰＯ地域連携会議」が立ち上がりました。子ども・福祉・若者など各分野でのコロナ禍の状況や取り組みの共有を目的に、週２回オンラインで継続的に開催した緩やかな会議です。この会議では、刻々と変化する状況共有のほか、コロナ禍で家計が厳しい家庭に食材を提供する「せたがやこどもフードパントリー」などの新しい取り組みも報告され、それらの活動をみんなで応援し合うことも行われました。

そして、この会議での話し合いから「三茶にサンタがやってくる！」が企画されました。上記、パントリーを利用する家庭の子どもたちへクリスマスプレゼントを贈るための寄付を集めるチャリティイベントです。２回目となる２０２１年の開催当日（12月13日）は、40人のサンタが集まり、お菓子を配りながら三軒茶屋周辺を練り歩いたほか、クイズに答えながら散策するウォークラリーも実施し、70人の子どもたちが参加しました。また、世田谷線を借り切った「サンタ電車」には、サンタのほか医療的ケア児とそのご家族も乗り込み、キャンペーンをアピールしました。事前に参加費としていただいた寄付のほか、当日の街頭募金も加えて、12月18日に３８０人の子どもたちへ図書カードを渡すことができました。

準備はオンライン中心で自分たちの持ち出し、短い期間でこのような取り組みが実行できた背景には、コロナ以前の人的な地域ネットワークが生きたことが大きいように思います。世田谷では、地域で活動している人同士の分野を越えた交流が日常的に盛んであり、今回の会議の立ち上げも、そうしたネットワーク経由で呼びかけられました。今は難しくとも、日頃の地域ネットワークが育まれていれば、こうした取り組みのように、いつか文化として新たな芽を出すのではと感じています。

いちかわ とおる　株式会社世田谷社 代表取締役、まちづくりコーディネーター

1977年、東京都生まれ。学生の頃から世田谷のまちづくりに関わり、卒業後も継続して関わるため世田谷社を設立。日頃の活動相談から、ホームページなどの制作からワークショップの進行、イベントの企画立案まで、世田谷を中心にさまざまな市民活動のお手伝いをしている。ほかにも一般財団法人世田谷コミュニティ財団やNPO法人せたがや子育てネット、NPO法人SAHS、NPO法人つどい、駒沢給水塔風景資産保存会、羽根木プレーパークなど地域の市民活動団体の役員も務める。